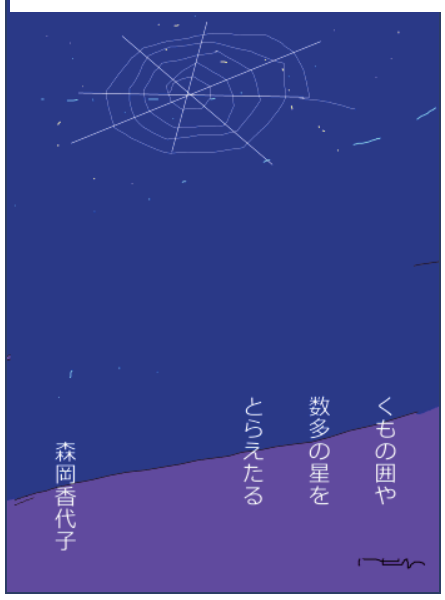
■今月の特選句

2022年9月



くもの囲や数多の星をとらえたる

森岡香代子

ふと軒先を見ると蜘蛛の巣がある。その向こうには星が光っている。蜘蛛の囲越しに星空を見ての実感句。スケールの大きな想像力が愉快。

パリッパリに乾くジーンズ夏旺ん

柳村光寛

乾く速さは瞬間冷凍ならぬ瞬間乾燥ともいうべきで、板のように堅くなる。夏の陽射しの強さを乾くジーンズに実感したことが滑稽句になった。

押しだされ水からくりの心太

井口夏子

ところてんが小さな箱から押し出されて出てくるのは子どもの目には不思議なことで、手品のように思えたものだ。まさに「水からくり」である。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の特選句

2022年9月

雷を避けて通れぬ避雷針

桑田愛子

雷を真っ先に受け止めるのが仕事だが、本当は避雷針だって雷は怖いのだ。逃げ場がない。避雷針の気持ちを分かってくれる俳人は初めてだね。

放課後のいの一番のかき氷

久我正明

何かを頑張った後のご褒美の味は格別である。「いの一番」に、楽しみに思う気持ち、かき氷の美味しさ、午後の暑さ等の色々が凝縮されている。

性格の違う茄子（なすび）の光り合う

鈴木和枝

茄子に人間を投影した句とも言える。妙に茄子が人間っぽくて可笑しい。茄子達は同級生か兄弟か。きっと仲良しで時々喧嘩もするのだろう。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の秀逸句　（・・・七七をつけてみました）

冷蔵庫に叱られながら探しもの　伊藤浩睦
・・・早く閉めろとうるさい奴よ

流れ星無限の空から弾かれて　稲葉純子
・・・なにか悪戯したんじやないか

かなぶん寄り来る感染者とも知らず　相原共良
・・・感染したら自己責任じや

溝浚へみな一斉にさする腰　和田のり子
・・・腰痛とても仲間意識に

相続を争う田にも青田風　吉川正紀子
・・・相続争ひ忘れさせるか

水澄めばペロリと切手舐める癖　田中やすあき
・・・シールの切手は舐めたら駄目よ

ほどほどの重さがほしい夏布団　山本　賜
・・・グラム単位でオーダーメイド

朝寝坊説教するかに蝉時雨　山下正純
・・・蝉もほとほと手を焼く季節

汗かいてかいてかいてさびしくなる　大林和代
・・・冷たいものでも飲みにおいでよ

実石榴の落つるしかなき過疎の村　久松久子
・・・ぽとりと落つる音の響くや

試合には負けた帰りの猫じゃらし　八塚一青
・・・お好み焼でも食べに行こうぜ

あぶれ蚊の動体視力試しゆく　東　麗子
・・・試してるのは蚊か人間か

窓を拭く入道雲に脚掛けて　椋本望生
・・・気をつけないと危ないですよ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の滑稽句

＊今月の特選句･秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

青蚊帳に封じ込めるかコロナ菌	相原共良
亡き母か肩にやさしき糸蜻蛉	相原共良
無位無官駆けずり回る炎天下	青木輝子
更衣戦後育ちで捨てられず	青木輝子
飛び切りの値がつき秋刀魚はっちゃける	青木輝子
道端の蜥蜴驚く三角顔	赤瀬川至安
何か変ついりも明けも六月は	赤瀬川至安
秋田犬別れの曲に三尺寝	赤瀬川至安
初茄子の色気づきしや茄子紺に	荒井　類
豆飯の味とかをりと妻の笑(ゑみ)	荒井　類
青雲のこころざし持つ雲の峰	荒井　類
片蔭の見えて疲れの足勇む	井口夏子
日盛やちらり脳裏にコカコーラ	井口夏子
横綱不覚桟敷の美女にみとれたか	池田亮二
全手動扇風機なる古団扇	池田亮二
電気バス尾瀬の万緑縫うて行く	石塚柚彩
温暖化に北上の鹿黄菅食ふ	石塚柚彩
幽霊草峠の闇の中に立つ	石塚柚彩
猛暑来て猫は廊下で長くなる	伊藤浩睦
端居する猫に利かない猫だまし	伊藤浩睦
道をしへ近づきもせず離れもせず	稲沢進一
知らぬ間に我が家の一員燕の子	稲沢進一
秋の蟬家も山河も揺れにけり	稲沢進一
風鈴やそよ風さんに空とぼけ	稲葉純子
飛び方を知らず八月の千羽鶴	稲葉純子
麻酔して胃カメラ通る長き蛇	井野ひろみ
半額のピザの旨さやアイスティー	井野ひろみ
夕立や如雨露の水に負けてゐる	井野ひろみ
バスの窓開ければ飛び込む蝉の声	上山美穂
水玉の服にしよう猛暑だから	上山美穂
日の文字のふたつもあって暑さかな	上山美穂
願ひ事あり石仏に萩の花	梅野光子
つり橋をゆらして秋を渡り終へ	梅野光子
光る汗バスの少女の襟元に	梅野光子
小指に触れぬ人差し指や秋扇	遠藤真太郎
避暑地でのあるあるカフェに散歩族	遠藤真太郎
ビール党二股かけてワイン党	遠藤真太郎

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事･写真･イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写･転載等を禁じます。

日光黄菅今年の夏をとじました	大林和代
全身を殺菌される炎天下	大林和代
特大の虹にも賞味期限かな	小笠原満喜恵
炎天へするする登り消防士	小笠原満喜恵
存在の主張の集団蝉しぐれ	小笠原満喜恵
月光を火種に明けの明星は	岡田廣江
雄花は落ちて雌花は残る糸瓜かな	岡田廣江
引き波のすぐに返さず秋の浜	岡田廣江
コロナ禍に心の中もマスクして	北熊紀生
持ち歌の尽きて無音の夜長かな	北熊紀生
あから顔隠す祭の天狗面	木村　浩
主催者の目を盗み呑む祭酒	木村　浩
俳句詠む宇宙ブランコゴキゴキゴキ	金城正則
マスクとボールペンと俳句手帳	金城正則
空蝉や木の葉に絡む風の中	金城正則
かき氷食べたでしょう舌赤い	久我正明
放つもの立ち小便にロシア銃	久我正明
払暁の思念彷徨ふ芥子坊主	工藤泰子
妖怪の一反木綿は寝莫蓙に化け	工藤泰子
巨き脚寝莫蓙の端のはしつこに	工藤泰子
脚八本日焼けてバスの停留所	桑田愛子
猫車伏せれば黙り大夕焼	桑田愛子
参議院選応援の笑顔いまいづこ	佐野萬里子
戻り梅雨高血糖にインシュリン	佐野萬里子
蚊遣香腰にぶら下げ袋掛	佐野萬里子
大人食ひ夕張メロン真つ二つ	壽命秀次
停まるたび炎暑乗り込むローカル線	壽命秀次
バストだけ増量図る更衣	壽命秀次
廃校のプールが住処水馬	白井道義
天国に住所変更合歓ひらく	白井道義
まつさきに駆け出す犬や海開き	白井道義
目隠しの半分ずれて西瓜割り	鈴鹿洋子
日盛や貨物列車の長々と	鈴鹿洋子
口中にほろりほどける祭鱧	鈴鹿洋子
「正常です」自動ドアそれから開く	鈴木和枝
子どもが大好きおたまじゃくしは隠れてる	鈴木和枝

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

石仏の性根ぬけたる極暑かな	髙田敏男
若ぼんはいつも自己流盆踊	髙田敏男
かぐや姫今日は帰れぬ無月かな	髙田敏男
見飽きたる夫に夏帽かぶせみる	高橋きのこ
炎天下マスクはずせばあなた誰	高橋きのこ
なすすべもなくエアコンの下に老ゆ	高橋きのこ
からすみはとどのつまりやもう一献	竹下和宏
ひぐらしでその日暮らしの暮れにけり	竹下和宏
休肝と決めし日に着く新酒かな	竹下和宏
梅雨明やひやとひ飯場から帰る	田中　勇
夏の風邪飛田新地を通り抜け	田中　勇
暴動の騒ぎ声する熱帯夜	田中　勇
期日前投票帰りの冷素麺	田中早苗
車椅子押して酷暑の投票所	田中早苗
クーラーの風吐く力も尽き果てて	田中早苗
宿題の山を駈けぬく日焼顔	田中やすあき
帰省子の痛みだしたり親不知	田中やすあき
完敗をすれど乾杯するビール	谷本　宴
油照井戸からお岩出てくるか	谷本　宴
百日紅猫も滑るかさるすべり	谷本　宴
夕立に洗車まかせて投句練る	田村米生
短夜や中途半端な夢ばかり	田村米生
百日紅口をすべるは愚痴ばかり	田村米生
夏手袋に齢を隠し立ち話	月城花風
炎天下途切れぬPCRの列	月城花風
白肌を死守するつば広夏帽子	月城花風
何食べたと聞きたくなる草の息	土屋泰山
夕立があって何故ない朝立は	土屋泰山
暑気払い出世払いのはしご酒	土屋泰山
今昔アイスクリームのモナカ食ぶ	坪田節子
とどろくや夏のバイクのエンジン音	坪田節子
蝉鳴けばあめがあがると父のいふ	坪田節子
文の月母の草書は感じ讀み	長井知則
天の川昔はもっと水があり	長井知則
坂道を孫が先行く墓参り	長井知則
船降りてはや島の子に夏休み	名本敦子
百人に百の歴史や終戦日	名本敦子
山鳩の声のひとしほ涼新た	名本敦子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

よさこいや綺麗どころの打つ鳴子	西野周次
青蛙ひとつ跳びしてひと思案	西野周次
断腸の思ひで落ちる桐の花	西野周次
秋に入るとは名ばかりの見本なり	花岡直樹
子ども代表の誓いに泣かされ原爆忌	花岡直樹
熱帯夜冷やしてくれるのはビールだけ	花岡直樹
筒姫のお出まし乾いた風つれて	浜田イツミ
すんなりとねぢ花どうしねぢれ合ひ	浜田イツミ
まるで趣味ほぼ毎日の墓参り	浜田イツミ
鯖雲や西に乗り出す馬具櫓	東　麗子
秋蟬のふくらませをる城の杜	東　麗子
褒められて真赤な紅葉となりにけり	久松久子
墓参り向かう三軒両隣	久松久子
歯ごたへの音おおげさに胡瓜食む	日根野聖子
白靴の白白すぎるおろしたて	日根野聖子
ご陽気にパイナップルはパイナポー	日根野聖子
老体に命懸けなる猛暑かな	細川岩男
生ビール喉元過ぎて又ビール	細川岩男
あれやこれ帰省土産の親心	細川岩男
蝉声しきり八日目の蝉切々に	南とんぼ
動くナマケモノ見つつ静止の夏バテ	南とんぼ
見ないで下さいカボチャ割る後姿	南とんぼ
ごきぶり打つ見せてはならぬ今の顔	峰崎成規
躓いて忘れ物知る厄日かな	峰崎成規
複眼は瞑る暇なし赤とんぼ	峰崎成規
平泳ぎ丸き地球を抱くやうに	椋本望生
ふいと来し安井道頓どぶ浚ふ	椋本望生
虹二重愛しき人を招きたや	村松道夫
夢見るは陸（おか）の暮らしや水すまし	村松道夫
貧しさや同じ服着る更衣	村松道夫
季語の打水アスファルトに拒絶され	森岡香代子
アフロヘアかゆくてならぬ蝉しぐれ	森岡香代子
キャンバスに赤をぶちまけ大夕焼	八木　健
かな文字のやう凌霄の垂れて咲く	八木　健
蛇口はあらず滴りの岩肌に	八木　健

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

瓢箪の下で説教うけている	八塚一青
すこし良い線香焚いて盂蘭盆会	八塚一青
食卓の絶滅危惧種鰻丼	柳　紅生
かたつむり性善説を引き摺りて	柳　紅生
焼き烏賊の眼鏡のかたちに指で裂き	柳　紅生
朝顔に体内時計の装置あり	柳村光寛
日没後九時間で咲く牽牛花	柳村光寛
終楽章のトライアングル涼やかに	山内　更
炎天の殺菌効果のじりじりと	山内　更
山の端に入道雲のトッピング	山内　更
朝ゼミのオーケストラにタクト振る	山岡純子
炎天下色鮮やかにさるすべり	山岡純子
うたかたに夏は過ぎゆきキリギリス	山岡純子
月涼しひとひの終わり近づきぬ	山下正純
急流の音涼しくて雨の跡	山下正純
美味しい血を選ぶ権利を駆使する蚊	山田真佐子
シロップをかけたくさせる雲の峰	山田真佐子
着物を幽閉虫干の時期なれど	山田真佐子
澄む水を守るは電気熱帯魚	山本　賜
あくびするも泳ぐもカバの夏なりき	山本　賜
国葬は民意ミーンイと蝉の声	横山洋子
たそがれに道しるべなる凌霄花	横山洋子
第七波避けて孤独な昼寝かな	横山洋子
夏掛けに蹴飛ばされるといふ運命	吉川正紀子
憎らしい汗のブラジャー脱ぎ捨てる	吉川正紀子
免許証還し胸元チト涼し	吉原瑞雲
軒下や歩くかたちに靴干され	吉原瑞雲
蚯蚓鳴くいくさの種は尽きもせず	吉原瑞雲
廃校のリストに母校月見草	渡部美香
熱々のアスファルト延べ炎昼の異国人	渡部美香
大鼾ますます高く残暑かな	渡部美香
青柿や七十代はまだ青し	和田のり子
甚平を妻に着せては諸手打つ	和田のり子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。